

ゆうこみゆき。



なるほどアイヌ文化トーク ソッコ de ソッコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学教授)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソッコ(=お便り)形式で語り合います。



今月のテーマ ポクナモシリ(あの世)

アフナン アツパケ タ アナクネ フツネ ワ...
〔洞窟に入った最初の頃は狭くて...〕



イラスト/安田千夏

アイヌ語で「あの世」を意味するこ
とばはいくつかあるけど、代表的なの
は「ポクナモシリ」かな。ポクナニ下の方
の、モシリニ国土という意味なので、どうやら亡
くなった人の世界は地中にあると考えられてい
たみたい。え？それじゃ、さぞかし暗くて怖い世
界なんだろうって？ところがそうでもないの。あ
の世の人たちは、この世と同じような明るい世
界で、チセ(家)を建てて穏やかに暮らしてらん
ですって。だから、死の瞬間はちよつと苦しかった
りしても、それさえ過ぎれば死ぬこと自体はそ
れほど恐ろしいことではなかったと考えられて
たよなの。

ただ、あの世の人たちの食べ物、子孫たちが
捧げてくれるお供物なんだって。だから、先祖供
養をしない親不孝な子どもを持った人は、いつも
お腹を空かせながら、他の人たちに山のような
お供物が届くのを羨み、悲しんでいるとのこと。
もうつびつくりなのは、そのお供物は、送り手が
ご先祖様の名前をちゃんと口に出して言わない
と届かないってこと。宛先の書いてない宅配便
みたいなものかな。だからかつては皆六代くら
い前、すごい人は十二代前までの先祖の名前を
すべて記憶していたと言われます。

ところで美幸さん、白老には「あの世の入り
口」があるんですって？



そうなの、白老と登別の境に流れる伏古別
川沿いの海岸にアフルンバラと呼ばれる「あの
世の入り口」があるの。白老のアフルンバラは、
亡くなった人が磯で昆布採りをしているとか
妖怪がいるという噂もあって近づく者はいな
かったという話。近年では砂が堆積して僅かに
窪みが見える程度でしたが、漁港が出来る前
までは満潮時になると磯舟に乗って入れる程
大きかったんだって。

あの世に行つて返ってきた人の話に「穴に入
ったら、穴は次第に狭くなって立つて歩くこと
が出来ない。やつとのこと這い進んで行くう
ち、急に明るくて広いところへ...」と、狭く長
いトンネルのような道を抜けると明るい新し
い世界が広がっているという話が多いの。平
成四年に白老のアフルンバラに実際に入った
人の話に「私は腰を屈めて中に入った。奥行は
十四〜五メートルで行き止るが、洞窟は左へ
三〜四メートル程の幅で続いている。奥に進
むほど暗く...この先は這つて進むよりない。
...さらに洞窟は右に続いている...」と伝説そ
のままの体験談も。でも、アフルンバラに入る
なんて怖くなかったのでしょうか？生きて
ままポクナモシリに行った者は、この世
に戻つても長くは生きられないという
話もあるのね。

